

私は舞姫のストーリーを書き換えてみようと思う。動機は私はこの森鷗外が書いた豊太郎が最低の男だと思うから、私がストーリーを書きかえてもう少しましな男にして何回も読みたくなるような小説にしたかったから。

何が最低かなのかというと言うと、やっぱりエリスを裏切ったということ。それも、深く考えもしないうちに関係を断つと軽々しく言い、エリスが自分のことを深く信じて、愛してくれていることを知っていながら名誉挽回のために日本に帰るという最低な理由で・・・。

そこで私は、教科書の P284～を書きかえてみることにした。

相沢が大臣と一緒に日本にやってきて、僕と呼んだので旧友に会いに行く目的で行くことにした。

相沢はたくさんの質問をしてきて、最後に、「今後君の能力を生かすためには、エリスの仲を断て、腹を決めてエリスと別れろ」と言った。

弱い心を持つ僕は答えがすぐには出せなかった。

悩みに悩んだ末やはり頭に浮かぶのは、エリスだった。それは多分、ちらっと見ただけで心の奥まで届くような他人とは違う透き通った目を持つエリスだからこそ、今までの花のない僕の人生に花をそえてくれたエリスだからこそそのことであろう。

今まで品行方正に進んできた生活の中にはなかった愛情というものを知った。

名誉のために生きて、一歩踏み外すことも恐れひかれたレールの上を歩む僕は、もういない。意見もはっきり積極的に述べるようになったし、興味があることに対しては思いのままに心に向けてみるようにもなった。

僕は「本当の自分」を知って変わったんだ。

今は名誉より大切なものがある、それはエリスだ。

このことは自分でもはっきり分かる。なぜなら、エリスの身の上が「当時の奴隷」とも言われた踊り子であり、非難されたにも関わらずエリスに対する愛情が強くなったからだ。今までの名誉を守りたい僕ならば考えられない。

僕は相沢に「エリスとは別れない」そう言った。

ロシアから帰った数日後、伯しゃくは僕に「一緒に日本に帰らないか」と言ってきた。そのとき僕は確実に近づいてきている名誉挽回のチャンスに、一度は捨てたと思った立身

出世を求める心が再びわきあがってくるのに気がついた。

生まれつきなのか、何なのかも分からない、優柔不断で臆病な弱い心はやはり簡単には消えず以前と変わらずあった。名誉より大切なのはエリス、そう頭では分かっていた。しかし、弱い心のせいでエリスを選びきれない自分がいた。

このまま日本に帰ったならば、昔のように何も心配することなく安定した生活が送れると思う。

が、そこで僕は思い出した、そんな生活は本当に自分が望んでいる通りの生活ではないということ。そのことを知って僕は自分らしくありのままに生きていこうと決めたことを。このまま日本に帰ったのでは、僕は何も変わっていないじゃないか、ドイツに来て一時的に自由になれたことにうぬぼれていただけじゃないか。

その時僕を深く信じてくれていて愛してくれているエリスを裏切ることはいけないと思った。

このことをさらに強く確信させたのは、貧乏ながらも真心から僕を助けてくれたエリスのやさしさや、エリスを抱きしめた時にわきあがった愛しい感情だった。

真実の自分を知って変わったこと、そしてエリスの存在が今までの僕にはなかった断る勇気をくれた。

そして僕は伯しゃくに、

「日本には帰らずこの地に残ります」と言った。

その日から僕らの生活が再スタートした。貧しい中にもある楽しさが何より幸せだった。

(終)

私的にはこの豊太郎だったら嫌ではない。むしろ好きな方だと思う。最後の伯しゃくに断る決定的な根拠が見つからなかったのも、すごく弱い理由と妄想になってしまったのが少し心残りだ。

他にもところどころ自分の想像で書いてしまったのが、最終的うまくまとめられたかな。

私みたいな豊太郎に対する意見を持った人でもすっきりした気分を読み終えてもらえるとうれしいと思う。